

政治経済学方法論の偉大な先覚者

太宰春台に関する

内外の関心の広がり

清水 學
(高13回)

太宰春台（1680～1747年）は江戸時代中期の飯田で生まれた学者である。その名前は県歌の第5番の「旭将軍義仲も 仁科の五郎信盛も 春台太宰先生も 象山佐久間先生も 皆此国人にして 文武の誉たぐいなく 山聳えて世に仰ぎ 川と流れて名は尽きず」の歌詞でよく知られている。また飯田高校校歌にもある。今はうたわれていないが、3番前半の歌詞には「遊惰の世より抜け出でて 骨ある儒者の名を得たる 太宰春台先生は 昔この地に生れたり」と具体的な人物像が描かれている。しかし一般的には江戸時代の儒学者の一人という以上の具体的なイメージは持たれていないかも知れない。私が数年前から春台に関心を持ち始めた契機は、江戸時代の経済変容に関する一般的な関心であった。私は自分の専門の関係から、中東あるいは（旧ソ連圏）中央アジアで、いわゆる日本の近代化に関する関心を持つ若い人た



●しみず・まなぶ
阿智村会地中学校卒。東大教
学部卒。アジア経済研究所を経
て宇都宮大学・一橋大学・帝京
大学教授。南アジア・イスラーム世界・中央アジアの神話・伝
承・文学の視点を入れた政治分
析を目指す。

ちと接触する機会が多い。私はそこで日本の近代化を明治維新から考えるという俗説を批判する必要を痛感するようになっていた。江戸時代の独自の重要性を重視したいためである。

さて最近の大学入試「日本史」で最も出題頻度の高い信州出身者は太宰春台だということをご存じでしょうか。それは「山川日本史」教科書の記述と関連している。「18世紀初め、古文辞学者の荻生徂徠は都市膨張の弊害を指摘して武士の土着を主張したが、徂徠の弟子太宰春台は、むしろ武士が商業活動にのりだし、専売制度で利益をおさめるべきであると主張した」という部分である。近年、注目すべきは春台に関する関心が国内外で深まっていることである。顕著な例では下農御出身で大阪府立大学名譽教授の武部善人氏が、その著書のなかで、「春台は日本における経済学および重商主義思想の鼻祖」

として、同時に「世界的な理論経済学者」として極めて高い評価を与えていた（『太宰春台』吉川弘文館 平成9年）。また朝鮮の「実学」派の巨頭丁若鏞（1762～1836年）に与えた影響が韓国では注目されるようになっている。春台の関心と業績は実に広範囲にわたっている。「経世学」で有名な『経済録』と『経済録拾遺』のほか、『倭説要領』という日本語研究、『聖学問答』『論語古訓』などの徂徠派的儒学研究、『老子特解』、『斥非』などの詩文論、茶道や音楽論、中国語の歴史的研究などにわたる。一時期医者で糊口を凌いだ時期もあり医学にも関心が強かった。笛はプロ級であった。重要なことは多面的な関心が「経世学」で統一されていることである。「経世学」とは経世済民のための思想・政策の研究のことである。

理屈っぽい信州氣質

太宰春台は飯田で藩士の言辰の次男として生まれた。^{ときたつ}名は純で字は徳夫。通称弥右衛門で春台は号である。父が飯田藩主からお咎めを受けて飯田立ち退きを命ぜられて一家は江戸で浪人生活を余儀なくされる。春台9歳の時である。春台は15歳で但馬国出石藩に出仕するが無許可で致仕して、その後放浪して勉学、32歳で下総国生実

藩に出仕するが4年後に致仕した。32歳の時に荻生徂徠に師事して朱子学から「古文辞学」に転ずる。浪人後は自宅を紫芝園と称し弟子を育てる。プライドが強く、自分の流儀を守るために、人との衝突も少なくなかったが、猛勉強でも知られた。荻生徂徎門下では経世学分野での突出した第一人者としての名声を得るが、この分野では次第に師を乗り越えて行つた。

信州飯田に戻ることは一度もなかつたが、出身地への思い入れは深く、自分の著書に「信陽 太宰純」と記していることが多い。信陽は信濃国の異称である。私は飯田で生を享けて幼少期を過ごしたことの影響は春台には意外に大きかつたと推測している。信州人の特性を固定的に見るとか、ましてや時代を超えて不变だと決めつけることは危険であるが、春台は信州人の一面を代表しているように思われて仕方がない。一言でいえば、理屈っぽさであり、その理屈を頑固に徹底させる



太宰春台肖像（『先哲像伝』より）

るが、春台は信州人の一面を代表しているように思われて仕方がない。一言でいえば、理屈っぽさであり、その理屈を頑固に徹底させる

性向である。安易な妥協はしない。論敵は至るところにいた。しかし春台の偉大さは論理性を貫きながら同時に、現実の変化そのものを謙虚に考慮に入れる視点を学問的に築き上げていったことである。

知的挑戦であつた商業資本の発展

「武士による藩営専売制度」の提唱が春台思想の独自性と先進性の重要な事例である意味はすぐ理解できないかも知れない。元禄期を経た江戸中期で幕府・藩は貨幣経済＝商品流通の発展のなかで構造的財政難に陥り、他方では大商人の発展の一方、貧富の格差拡大が深刻化していった。これへの対応への復古主義的対応はわかりやすかった。それは商業活動を抑制するとともに農民からの年貢の取り立てを厳しくすることである。それには都市に居住する武士を地元の農村地域に戻すことであった。春台は当初、師の徂徠と同様な見解を持っていたとみられ、徂徠の「商人排斥論」は春台の儒学的価値観と合致していた。しかし現実の動向を常に重視していく春台の目には、商人資本の発展のエネルギーはどうしても無視できなかつた。春台の中では「貴穀賤金論」（金銭よりも米穀を大切にすべきとする思想）があり、それを乗り越える内面での葛藤は七転八倒の苦悶を伴つてい

たと思われる。「経済録拾遺」での藩営専売制度の提案は多くの事例に基づく説得力に富るものであつた。

独自の科学方法論の模索

春台は儒者として、また経世家として、政治経済の現実と格闘する過程で、次第に独自の科学方法論を模索していく。晩年の円熟期の代表作の一つである『経済録』の冒頭で、「およそ経済を論じる者、知るべきこと四つあり、一つには時を知るべし。二つには理を知るべし。三つには勢を知るべし。四つには人情を知るべし。」でそのエッセンスを提示している。なおここで「経済」とは「経世済民」の略で現在の「経済」の意味とは異なり「世の中をよく治めて人々を苦しみから救う」という意味である。春台は日本で初めて著作の題名に『経済』という言葉を使用した人として知られる。

4つの知るべきことのそれぞれが、学問と観察とを重ねた経験か



太宰春台の墓がある天眼寺（臨済宗妙心寺派）
= 東京都台東区谷中

らにじみ出る味わいを持っている。「時」は社会や制度の歴史的変遷、「理」は自然や事物の法則性を指す。自然における自然科学的物理的法則性だけではなく社会における法則性にも注目している。さらに「勢(いきおい)」の指摘は独自の認識で特に注目される。それは一般に該当する法則性が実現しない、場合によつては正反対の結果さえ生まれる偶然性・不確実性の存在の指摘である。現在でいう「複雑系」の認識にも通じる。最後に「人情」の指摘がある。人情（人のこころ）を知ることは「経済（政治）」にとつて極めて重要でありながら、それは「学問したるばかりにては知られず」、つまりいくら本を読んでいるだけでは理解することはできない困難な分野だといつている。さらに儒家でありながら、晩年に至ると、「時」に応じて、本来は儒教とは対立する老子の考え方、墨子、法家なども援用することも有意味という境地に達している。現実の複雑さを一層読み込んだ認識として注目されるのである。

世界のなかの太宰春台

私は春台の社会科学方法論を検討する中で、どうも日本が生んだ独自の思想家の一人というレベルをはるかに超えた、当時の世界的水準からも無視できない先進性と

独自の価値をもつ知識人ではないかとの評価を高め、襟を正さざるを得なくなつた。ちょうどスコットランドでデーヴィド・ヒューム（1711～1776年）とアダム・スマス（1723～1790年）が活動する直前に春台は知的活動を開いていたが、春台とアダム・スマスは客観的な経済法則を容認しつつも、それと社会・倫理との関係に深い関心を持ち続けた点で共通していた。それは今日においても極めて重要な示唆を与える課題である。私は春台思想が今まで過小評価されてきた背景は2つあると思われる。一つは荻生徂徠の弟子という位置づけで、春台が展開した独自の思想が注目されなかつたことである。もう一つは、儒学思想史の枠で春台が位置づけられてきたために、経済学および社会科学方法論という別の視点からの検討が弱かつた可能性である。今日、春台の仕事を国際的な比較と経済学の視点で見直すことが必要になつていている。

このように春台は極めて現代的意義を持つ問題を提起している。春台は国家の榮枯盛衰、文明の発生から崩壊という歴史の大きな流れを法則的に捉えることに深い関心を持っていた。易經の研究にも熱を入れていたのはそのためである。現在の世界と日本の現状を見るにつけて、その問題提起は重要なヒントとなると思われる。